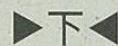


第91回センバツ

つかめ 栄冠

八学光星ナイン



「今年のチームは全国制覇を目指せる」。八戸市内で1月25日、センバツ出場の吉報を受けた仲井宗基監督はきつぱりと言いつつ、「(これまで)日本一」という言葉を簡単に口にしてこなかったが、このチームは自信を持って言える「日本一」を繰り返すことには理由がある。昨年9月、ヘッドコーチとして帯同した18歳以下日本代表のアジア選手権。高校トップレベルの選手たちと過ごす中で、光星ナインとの違いを目の当たりにした。「技術面は大差ない。一番差を感じるのは、フィジカルと気持ちの面」。とりわけ、強靱な肉体と勝利に

かける思いが桁違いだった。選手たちに全国大会での優勝を意識させるため、本気にさせるため、あえて「日本一」を繰り返してきた。「気持ちが変われば、勝利のために何ができるか、考えて行動するようにするはずだ」

甲子園に出場するだけで満足してはいけない。ナインの意識も変わり始めた。例えばエースの後藤丈海は、練習中にチームが暗い雰囲気になった時、率先して盛り上げるようにしている。「他の選手より試合経験がある分、自分が引つ

変わり始めた選手の意識

張らないといけない」という自覚が生まれたからだ。「自分が今何をすべきか、練習中から考えて行動することが大切だ」と仲井監督。その意識を続けていけば、試合中どんな展開になっても、また失敗しても、「どうすればいいか」自分たちで考えてプレーできるようになる。ミスを繰り返すこともなくなるという。

今回目標に掲げる「走攻守そろったチーム」。投手力や打撃力、どれか一つだけたけていても、全国で勝つことは難しい。この中で「走の鍵を握りそうだと、仲井監督が注目するのが伊藤大将と島袋翔斗の1、2番コンビだ。

足が速い2人だが、「力を生かし切れていない」。打力が安定した3番武岡龍世、4番近藤遼一で得点するために、上位2人の出塁

がポイントとなる。さらに、失敗を恐れずに次塁を狙う姿勢を見せることで、チームに勢いを与えてほしいというのが願いだ。

「自分にとって、センバツはスタートライン。(3日本一の栄冠はきつとその先に待っている。(里村静



仲井監督、全国制覇明言

センバツ出場の吉報を受けたナイン。仲井宗基監督が「甲子園にふさわしいチームに」と声を掛ける＝1月25日、八戸学院光星高